

Ep. 5

MAPPSの
付帯サービス

共有すれば、話が早い

大規模館からの助言をヒントに、再び検討に入った当社の SaaS プロジェクト。システム導入を押し付けるのではなく、本当に館のためになる「機能」を付加することはできないか？ ヒントは、業界外の「専門家」の存在にありました。

もしかしたら、より大規模な博物館から協力が得られるかも知れない。そんな朗報を得て気分が軽くなった私は、社内で再びディスカッションを始めました。

発端は、ヒアリングに伺った館の学芸員の窮状。でも、スタッフはそれぞれに、似た境遇にある館の心当たりがありました。当社が直接コミュニケーションを取った館だけでも、学芸員が1人しかいないケースはままあるのです。

もちろんシステム導入に漕ぎ着けるのは稀であるため、いままでは営業や SE が個人的に相談に乗っていただけ。当然、それも PC やネットワークに絡む話に限られます。私たちは、他の知識を持っていませんから……ん？

館の周囲に多数存在する「専門家」たち

PC まわりのことなら、ビジネスを抜きに相談に乗ることもできます。それは、当社がシステム開発会社だから。ならば、たとえば作品の梱包作業に困った時、学芸員は誰に訊ねればいいのでしょうか？ 先輩や周囲の協力者？

いいえ。最も詳しいのは、もちろん運送会社です。

図録づくりなら印刷会社。展示の照明なら照明器具の製造会社。よく考えたら、「専門家」はいくらでも存在します。彼らが直接、館の相談に乗ってくれるとしたら？

有志が集まって、学芸員の實務に役立つサポート情報を提供するサービス。文化守護の主旨であれば、快く手を挙げてくれそうな「業者さん」は、私の周りだけでも何人もいます。彼らのノウハウやハウツー情報を集めたデータベースを構築してみたらどうか？ そんなアイデアが、大きな転機となりました。

教え、教わるよりも、共有したほうが早い

当社内でも毎号スタッフ全員で回覧している『博物館研究』をめくってみると、博物館という特殊業務にサービスを提供している企業の広告が多数掲載されています。彼らも、自社の情報は積極的に発信したいと考えているはず。

その前のページには、業界人や学術関係者の皆様の寄稿文がギッシリ。当社が懇意にさせていただいている方の論文も珍しくなく、主旨を説明してお願いすれば書き下ろしてくださるはず。各々の専門分野の知識や研究成果について、快く共有を許してくださることでしょ。

いや、それだけではありません。館が互いに知っている事を教え合えば、館同士・学芸員同士で業務情報を共有することもできます。

そう言えば、SaaS 版 I.B.MUSEUM は、ひとつのシステム（アプリケーション）を各館で共有するというスタイルが前提となります。ならば、データベースの器だけでなく、有益な情報も共有してしまっは？ あの学芸員が仰っていた Web サービスは、十分に可能です……。



ビジネスを抜きに考えても、博物館のアナログ管理が限界に達していることは明らかです。もはやデジタルアーカイブ化は必須ですが、地方の小規模館には経済的にも人員的にも余力がありません。ならば、日常業務に PC やネットワークを利用するだけの確かなメリットを用意すれば、システム化、デジタルアーカイブ化の敷居は下がるはず。

それは、システムというよりも、館内情報と外部情報を併行管理するプラットフォームの開発を意味していました。